
Love of prototype

キルミィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love of prototype

【Nコード】

N1489H

【作者名】

キルミィ

【あらすじ】

幼き日に、少年と少女は叶うことのない約束をした。 　　いつか結婚して、幸せな家庭を築こう 　　2人は幸せだった。 　　真実を告げられるまでは……。その日、唐突に、愛し合う2人は引き裂かれた。

プロローグ

その夜は満月だった。

草原の上に少年と少女は寝転がり、星空を眺めていた。

少年は少女の手を取り言った。

俺がずっと、そばにいるから

少女は小さく頷いた。

ありがとう

その日2人は、叶うことのない約束をした。

いつか結婚して、幸せな家庭を築こう

プロローグ（後書き）

小説書くのって難しいですね…

頑張って完結させますので、よければ最後までお付き合いください

第1話：約束

人混みの中、隣にいたはずの彼女　渚がいなくなっている。

渚・・・???

前方に渚の後ろ姿が見えた。

あ・・・渚・・・おい！！渚！！

渚は俺の声に振り向きもせずに行ってしまった。

渚！！渚！！

渚が・・・渚が行ってしまう・・・。

待ってくれ・・・お願いだから行かないでくれ・・・！！

「渚あーーーーーっつっ！！！！！！」

ドタッ

痛ッ!?

「雄輔!?!」

ベッドから落ち、夢だったのかと気づきホッとする。

「雄輔大丈夫!？」

「あ……ああ。おはよう。」

「うん、おはよう。」

そうだった。

今日から渚と一緒に住み始めたんだった。

一緒に……といっても、二人きりでというわけではない。

渚が俺の家と一緒に暮らすことになったのだ。

渚は5歳のときに交通事故で両親を亡くし、祖父母の元に引き取られた。

そのときのショックで、渚は記憶喪失になってしまい、両親の記憶が全くないんだと言っていた。

俺が渚と出逢ったのは小学校に入学した年だ。

小学校の間は6年間同じクラスで、渚は俺の初恋の人。

いつから好きになったのかはよく覚えていないが、初恋が実ったのは小学校5年生のときだ。

学校行事のキャンプの夜、俺と渚は宿舎をこっそり抜け出して2人で星空を眺めながら約束した。

いつか結婚して、幸せな家庭を築こう

渚は祖父母の家で育てられてとても幸せだったと言っていた。

おじいちゃんもおばあちゃんも優しく、毎日楽しいんだよ、と笑顔で話してくれた。

ただ、両親との思い出がないために、お父さん、お母さんという存

在がどういうものなのかはよくわからない、と言って渚は寂しそうに笑っていた。
そのときの渚の表情^{かお}をみて、俺は、渚に家族の温かさを教えてやりたいと思った。
俺がきつと渚を幸せにしてやるんだと、そう決めた。

高校受験の少し前に、俺の父親の都合で神奈川へ引っ越すことになり、渚にその話をする、「どうしても一緒に行きたい」と言っていた。

俺たちが前に住んでいたところは兵庫で、引っ越すとはばらく会えなくなるのがお互い寂しくて、渚と一緒にお互いの家族に、2人で暮らしたいと説得した。

その結果、それはまだ早いしいろいろ不安があるから、俺の家で一緒に暮らすのがいいんじゃないかという結論になった。

そのとき俺はまだ14歳だったが、渚の祖父母に、渚と結婚させて下さいとお願いした。

俺が本気だということが伝わったのか、快くOKをもらうことが出来た。

受験では俺も渚も同じ神奈川の公立高校に合格し、今年から一緒に高校に通うことになった。

渚にはまだ正式なプロポーズはしていないのだが、高校卒業して、俺が18になったら、すぐにも籍を入れたいと俺は考えている。

引っ越しが決まったときは、どうしたらいいのかわからずかなり悩んだが、こうして渚と一緒にきてくれることになって嬉しかった。
渚のそばにいてやれることも、渚がそばにいてくれることも、本当に嬉しい。

ベッドから落ちたことを心配してくれた渚の明るい表情を見ながら、俺は最高に幸せを感じていた。

そしてその幸せが、ある日突然消えてなくなるかもしれないなんてことは、考えもしなかった

第2話：春の始まりは2度目の遊園地

渚と家族と共に神奈川にきてから、5日ほどの春休みはあっという間に過ぎていった。

引越しの準備や片づけでドタバタしてなかなかゆつくりできなかったが、入学式を翌日にひかえた今日、やっと渚と2人で遊びに行く時間ができた。

「渚ちゃん!!」

あ・・・母さんが1階から渚を呼んでる。

「はい～～!!」

バタバタバタ・・・

渚が階段を駆け下りて・・・

ドターーーンッ!!

「うおッ!?渚ッ!?!!?」

俺も急いでベッドから起き上がり階段を駆け下りた。

渚が階段の下に腰をおさえて座り込んでいる。

「渚、大丈夫か!?!」

「あ、雄輔～～」

「どうした!?!」

「ちよつとすべつちやって、腰ひねっちゃった・・・ハハ」

「おいおい～～・・・」

母さんが笑いながらやってきた。

「渚ちゃんったらホントにおっちょこちよいなのね」

「あははは～～・・・」

「ゆう、渚ちゃんのこと、あんたがちゃんと守ってあげなさいよ」

「言われなくてもわかってるよッ!!!」

「フフフ。はい、渚ちゃん。湿布」

「あ、ありがとうございます〜」

「渚、お前、階段とかほんとに気をつけるよ〜?」

「うん〜;…気をつけます!」

「よろしい。」

「うふふふ… 渚ちゃんとゆつたら、本当に仲がいいのね」

こういう毎日が俺にとって本当に幸せだ。

渚が俺の前で笑ってくれて…

本当に、俺が渚のこと守ってやらなきゃな…

「…け…雄輔?」

「…あ…な、何!」

「どしたの??ポニーっとして〜。」

「いや、なんでもない!」

「ふう〜ん??」

「あ、それよりさ、今日どうする!」

「デートツ!」

「おう!」

「わー!」

「どこ行きたい??」

「う〜ん…遊園地!」

「遊園地かあ〜…じゃ…さっさと準備して行こーぜ!」

「うん」

遊園地…前に一度、渚と2人で行ったことがある。

中学2年生の夏休み

「雄輔!」

「お、おい!!」
「早くー!!!!」
「へいへい・・・最初からジェットコースターかよ・・・」
「はー!ー!やー!ー!くー!ー!!!」
「あーもー!!わかったよ!!」

あんときは、遊園地入って1分でジェットコースターだもんな。
俺、実は絶叫系ってあんまり好きじゃなかったりするんですけど・・・
カッコ悪いと思って黙ってたおかげで渚に散々付き合わされてさ
そのおかげでまあ、ずいぶんと克服できたんじゃないかとは思っ
ただけだね。

「雄輔!!!!」
「ん?」
「ジェットコースター!!!!」
「お前・・・変わってねえくなあ!!!!」
「思わず笑いがこぼれる。」
「え・・・な、何が!」
「いや、何でもないw」
「何?」
「何でもないよ。ほら、あれ、乗るんだろ?」
「うん!!!!」
「ふはは・・・w」

『お待たせいたしました。発射いたしますので、シートベルトに・・・』

観覧車かぁ・・・。

観覧車には特別な思い出がある。

前に遊園地に来たとき・・・

「ねえ、最後に観覧車乗ろうよ!!」

「え・・・、でももう時間が・・・」

「いいから!!ね!!」

「おい・・・!!」

時間ギリギリに乗り込んだ観覧車からは、兵庫の夜景が見えた。

「うわぁ~~~~!!」

渚の目が夜景に反射してきらきら光っている。

「高いな」

「キレイ・・・」

「うん・・・そうだな」

「雄輔・・・あのね」

「うん??」

「あたしね、遊園地きたのって今日が始めてなんだ!!」

「え・・・」

「もしかしたらね、小さい頃にお父さんかお母さんと一緒にきたか

もしれないんだけどね・・・」

「そっか・・・」

「うん。遊園地に来たら何か思いだせるかもって思ったんだけどね」

「駄目・・・だったんだ」

「うん・・・へへ・・・」

俺の向かい側に座っている渚は、俺に向かって無理に笑顔をつくっ

てみせた。

「渚……」

「でもね、今日は雄輔と一緒に遊園地来れて、本当に楽しかったんだよ!!」

「そっか……そりゃ良かった」

「うん ありがとうね」

……知ってるんだぞ俺は。

お前が遊園地にきてる家族連れをうらやましそうに見てたこと。哀しい目で……

「渚……ッ」

「え……」

気づいたら俺は、渚を抱きしめていた。

「あ……あの……」

自分が渚の両親の代わりになってあげたいと何度も思った。

「雄……輔……」

代わりになんてなれるはずないのにな……

「ねえ……どうしたの……??」

渚……渚……もう泣くな……

「もう、泣くなよ。」

「え……あたし、泣いてなんか……」

渚は泣いていた。

本人は気付かずに泣いていた。

俺もいつの間にか涙を流していた。

少し……少しだけだけど、

渚の悲しみをぬぐってあげられたんじゃないかって思った。

「渚……」

「うん・・・??」

「わかるか??」

「何が・・・??」

「」

「へ??」

「頂上だよ」

「あ、ホントだ!!わあ!!凄い凄い!!」

渚がまた笑ってくれた。

良かった・・・。

「なあ、渚。」

「ん???.んあ..」

俺は渚が振り向いた瞬間

渚の唇に自分の唇を重ねた

「あ・・・雄輔・・・今のって・・・」

暗闇に渚の頬が紅潮していくのがわかる

「き・・・キス・・・!?!?!?」

「真っ赤だなw」

「ええッ!!!////」

はずかしそうにする渚が可愛かった。

「初めての・・・////」

「うん・・・あ、なんか俺ごめん……」

「いや・・・いいけど・・・////」

初めて・・・とか、深く考えないでしちゃったけど

女の子ってやっぱりそういうの凄く気にする・・・よな……

どうしようかな・・・

「い・・・ごめんな?」

「うん!!いいんだよ!!////」

「そっか」

「うん////」

ファーストキスが観覧車か・・・なんかスゲえロマンチックだなw

「また・・・来ような。」

「え・・・」

「あ、ほら、いつかさ。」

「うん」

「お前と俺が家族になってさ・・・」

「え・・・／＼／＼」

「そしたらまた来よう」

「うん・・・」

「ねえ、雄輔」

「ん？？」

「約束・・・覚えてる・・・??」

「家族になったら・・・ってやつ??」

「うん・・・／＼／＼」

「もちろん。今俺そんなこと思ってたよ。」

「あ、あたしも！」

「そっか」

渚を2人で笑い合う
家族になつたら・・・か

俺たちもう・・・

「家族・・・だよな??」

「ん・・・??」

「俺たちもう家族だよ。」

「え・・・」

「俺と・・・母さんと父さんは、そう思ってる。」

「あ・・・うん」

「お前は??」

「あたし・・・いいのかな??本当に」

「ああ!だから一緒に住んでんだろ!!」

「うん・・・家族・・・」

「おう!!」

「ありがとう・・・」

観覧車からは、俺たちの新しいスタートの地、神奈川の夜景が見えた。

今回は自然に、渚を抱きしめた

そして頂上に来たとき、俺たちは優しいキスをした

俺は

ずっと渚と一緒にいられるように

そう願いなから

(オマケ)

「あ、あのさ。」

「ん？？」

「次来的时候はさ、俺たちの子供も連れて来ようなッ!!」

「ッ!!！！！！」

渚・・・かわいいッ！！！！

バカップルでしたw

第2話：春の始まりは2度目の遊園地（後書き）

感想をぜひぜひお願いします
お待ちしております

第3話：新しい生活

玄関の扉を開くと、外には清々（すがすが）しい朝の光景があった。天気は快晴。

高校生活の始まりの日にふさわしい朝だった。

「渚、行くか！」

「うん！あ・・・えと・・・行ってきます〜！！！」

今日は、俺と渚がこれから通う、神奈川県立聖立高校せいりょうの入学式だ。入学式には、俺の両親、そして渚が今まで一緒に暮らしていた、渚の母方の祖父母が来てくれる。今日のために、昨日飛行機で兵庫から神奈川まで来て、聖立高校の近くのホテルに一泊しているのだと聞いた。

俺たちの新しい家は、新築ではないが一戸建てで、前に人が住んでいた期間はたった4年だったということもあり、白くぬられたコンクリートに特に目立つ汚れもなく、外観はとてもきれいだっただ。家の中もピカピカで、気持ちよく引越してくることができた。聖立高校は、その家から徒歩20分程の距離にある。

通学路を渚と2人で歩くのは初めてだった。

緊張して、お互いあまり会話もしないまま高校に到着した。

「着いたな」

「うん・・・」

「緊張してるのか？」

「うん、ちよつとね」

「クラス・・・一緒だといいな」

「え・・・？あ、うん・・・！！」

昇降口までいくと、クラス発表のされたプリントが、全部で10枚

10クラス分、入口のドアにセロテープで止められていた。

俺と渚は一緒に、左から順に一枚ずつプリントを確認していった。

そして7枚目にさしかかったとき、

「「あつた！！」」

俺と渚の声が重なった。

俺と渚は、同じ7組だった。

「雄輔と同じクラス・・・??」

「だな。」

「うわぁ・・・嬉しい・・・！！」

「ああ、俺も。」

「良かったあ〜！！！！」

まさか渚と同じクラスになれるとは思っていなかった。

全部で10クラスもあるのだ。

まあ、そのうち1組は数理コースで、10組は英語科のクラスになるので、普通科の普通コースは2組から9組までの8クラスということになるのだが。

渚と同じ空間で、同じ授業を受けることができる。

その時間を渚と共有することができる。
そう考えただけで、俺の高校生活はきつと充実しているだろうと思
った。

しかし、同じクラスに渚がいるとなると、俺たちの関係はすぐに周
りにバレてしまうだろう。
どう対処するべきか……。

いろいろと考え事をしていると、後ろから、トン、と軽く肩を叩か
れた。

「はい」

少し驚いて振り向くと、そこには、黒いスーツを身にまとい、黒い
縁のメガネをかけ、黒のハイヒールを履いた、黒いショートヘア
の女性が立っていた。

この学校の教師だろうか。

「あなたが……」

その見知らぬ女性は、観察するように俺の顔をじろじろと見ていた。

「あ……なんですか？」

俺が尋ねると、女性はチラリと渚を見てから、また俺に向き直り言
った。

「日比谷雄輔くんね。」

「……そうですね。」

俺がそう答えた瞬間だった。

隣に立っていた渚が、急にガクンと膝から倒れた。

「渚ッ!？」

「はぁッ……はぁ……」

渚は過呼吸の状態だった。

「渚!？落ち着け!大丈夫だ!！」

俺はすぐにしゃがみこみ渚の背中をさすった。

周りにいた新生が、渚をみて保健室に先生を呼びにいつてくれた。
そのおかげで、すぐに先生がやってきて渚の呼吸も落ち着いていた。

気付いたときには、黒スーツの女性の姿はなかった。
なぜ自分の名が知られていたのかは気になったが、渚のことで頭が
いっぱい、そんなことはもう忘れていた。
この教師であれば、いずれまた会うことになるだろうと思ってい
た。

それから渚は少し保健室のベッドで横になることになった。
俺は渚に付き添い保健室に行った。

そして、ベッドに横になった渚の隣においてあった椅子に座り、渚
に話しかけた。

「渚、もう平気か？」

「うん・・・もう大丈夫。なんか心配かけちゃってごめんね。」

「それなら良かった。てか、急にあんなふうになることとか、前
もあつたのか？」

渚は少し考えてから言った。

「たぶん・・・ないと思うけど。うん、私が覚えてる限りでは初め
て。」

「そうか・・・」

キーンコーンカーンコーン・・・

予鈴がなり、保健室の女の先生に声をかけられた。

「その男子生徒。名前、なんていうの？」

先生は机の前から立ち上がって渚の寝ているベッドに近づいてきた。

「あ、日比谷です。」

「そう、日比谷ね。そろそろ教室行つといで〜！オウ白水オウさんのこと心
配なら、休み時間にまた来てあげなさい。」

先生の胸には、田神と書かれた名札がつけられていた。

「わかりました。」

「それで、あなたと白水さんって・・・付き合ってるの？」

先生は、俺と渚の顔を見てにやにやしなうながら言った。

「え！？な・・・」

渚はベッドの上で赤面していた。

「あら。図星みたいね。」

そう言つて先生は満足そうな笑顔をみせた。

「いやいや・・・っ」

「大丈夫！秘密は守る女よ！！」

「いや、そういうことではなくて・・・」

俺と先生がそうこうしている間、渚はずっと顔を赤くしたまま黙り込んでいた。

「じゃ、渚。また後でな。」

「うん、ありがとう。」

そうして俺は保健室を出た。

ドアを閉めたあと、中から先生と渚の話声が少し聞こえた。

「で、白水さん。ほんとのとこどうなの？」

「え！？えっと・・・」

渚が恥ずかしがっている顔を目に浮かべながら、俺は教室へ向かった。

校内はまあまあきれいで、教室にはエアコンも配備されていた。

「へえ、クーラーつくんだな。」

席について独り言を言っていると、隣に座っていた男子生徒から声をかけられた。

「よっ」

そいつは茶髪で制服の着こなしもなかなかのもんだった。

いわゆるヤンキーなのだと一目でわかった。

俺は真っ黒な短髪で、「優等生」というわけではないが入学初日から髪の色を変えてくるようなことはしなかった、

クラスのやつらを一通り見まわしたが、あからさまな茶髪はそいつだけだった。

「おう。」

こいつ、このクラスでつるむ奴いんのかな・・・とか考えながら軽く返事をした。

「お前、中学どこよ？」

「あー、俺、兵庫から来たばっかなんだよ。」

「兵庫？俺の友達で兵庫に行ったやついた〜！」

「そうなんだ？」

「お〜!!！」

そいつと話してみると、その友達っていうのが偶然にも俺の隣町の中学のやつで、兵庫に遊びにきたこともあるらしくて、話が合った。

「お前〜、名前は？」

「日比谷。」

「俺、夏樹！」

「上が？下？」

「村上夏樹！」

「村上ね。」

「夏樹でいいって!!！」

「いや、村上で。」

「なんで!？」

「なんでって・・・」

俺は、神妙な顔つきで言った。

「村上じゃ不服か？」

「うん！」

「夏樹って呼んでほしいの？」

「うん！」

「お前・・・ホモか。」

「うん！って、ちっげー！ーよッ!!！アホか!!！」

「お前がな。」

「ああ!？」

「お前、おもしれえ〜なあ〜!!！」

「あぁッ!?!」

村上とは出会ってすぐに仲良くなった。

今までつるんだことのないタイプだったが、悪い奴じゃなさそうだな。見た目とは打って変わって、ド　なやつなんだと悟った。

入学式が終わって、村上としゃべりながら教室に戻ると、渚の姿があった。

「渚!」

渚が振り返って笑顔を見せてくれた。

「雄輔」

村上が過敏に反応した。

「え!?!何!?!渚!?!誰!?!彼女ッ!?!?!」

「あぁ〜?さあね〜。」

「はぁ!?!ちゃんと説明しろよ〜っ!?!」

「あぁ〜?俺に彼女いたら、お前になんか不都合でもあんのか?」

「ええ!?!マジで彼女!?!?!」

「お前……」

「うん?」

「やっぱりホモか。」

「だから違うって!?!てか!?!ホモだったとしてもお前を好きになんかなんね〜っ!?!」

「あー、はいはい。」

「ちゃんと聞け!?!」

村上のわめき声を隣に聞きながら、渚に歩み寄った。

「渚、もう大丈夫なのか?」

「うん!入学式の途中から体育館行ってたよ!」

「そかぁ。気付かなかった……」

「もう大丈夫だよ!元氣〜!?!」

「良かったぁ〜」

「あの・・・お友達？」

渚が村上を見ていった。

村上は、まっぴらしたといわんばかりにしゃべりだした。

「うん！！そーそー！！雄輔の友達！！で、村上夏樹つての！！よろしくね渚ちゃん！！あ、渚ちゃんて呼んでいい？え、ていうか雄輔の彼女なの！？こいつに聞いても聞き流されちゃってさあ！！ねえ、渚ちゃん、渚ちゃんは・・・うおッ！？」

「うるさい。」

俺は村上の頭を軽くなぐった。

「いつてー！ー！！！」

さらにわかったことだが、村上は無駄に声がでかい。

おかげでクラスメートのほとんどの視線が俺達にそそがれていた。

「いてえよ〜っ！！！」

「お前、声でけえ。」

「だからって殴らなくていいんじゃないですか！！！」

「はいはい。」

「てめえー！！！」

俺らのやりとりをみて、渚は笑っていた。

「あははは！村上くん、面白いね！」

「え、そう！？あは ありがとう。」

「お前・・・女もアリなのか。」

「いや、女の子だけだよ俺は！？勘違いしないで！？！？？」

「はいはい。」

「おい〜！！！！！」

「あはは！あ、あたし、白水渚です。よろしくね、村上くん！」

「え！？あ、うん！！夏樹でいいよ！！よろしく渚ちゃん。」

「お前。渚は駄目だぞ。」

「ん！？やつぱ・・・2人って付き合ってるのかあー！！！！！！！」

「！！！」

「・・・」

むろん、クラス中がこの言葉に注目していた。
そうして初日早々、俺と渚のことはクラス中に知れ渡った。

帰り道、俺と渚が一緒に帰ろうとしていると、村上が寄ってきた。
村上も通学は徒歩で、家も俺たちの家からそう遠くない距離にあるらしい。

騒がしい高校生活になるな・・・と、少し鬱になりかけたが、その反面、こんなやつとつるんでみるのも悪くないかもしれないと思っていた。

結局3人で下校した。

「つか、村上さあ〜」

「ん？なにになに？」

「俺と渚のこと・・・しばらくは秘密にしとこーと思ってたのに。」

「え？何？俺のせい!？」

「当たり前だろ!!お前はいちいち声がでかいの!!」

「ええ!?!マジ!?!あ、でもほら!これで渚ちゃんにへんな男が寄つてこなくなるんじゃない!?!」

「ああ、お前みたいだな。」

「俺ですか!?!俺はそんな男じゃねえよ!!なあ、渚ちゃん!!」

「え〜?どうだろ〜・・・??」

「ほら、渚も嫌がつてるぞ。」

「渚ちゃー!ー!ー!ん!ー!ー!」

「お前ツ!それ以上渚に近づくなあ〜!!」

「あらら〜嫉妬しちゃってまあ〜。大変な彼氏さんだね〜」

「あはは〜。。。!」

「村上〜!」

「うわ!暴力反対〜〜〜!!!!!!」

渚と村上と3人で笑いながら帰った。

村上とは途中で別れて、渚と2人きりになった。

「渚。」

「うん？」

「手……つないでいい？」

「……うん。」

そうして繋いだ渚の手は、白くて小さくて、とても温かった。

「渚、ちよつと寄り道していいか？」

「うん、いいよ。」

「良かった。」

「どこに行くの？」

「ちよつとね。」

寄り道して渚を連れていきたい場所があった。

家から少し離れたところにある桜並木。

500メートル程続いていて、今が満開だった。

「うわぁ……」

「どっ？」

「雄輔が来たかったところって……どこ？」

「うん。」

「凄い……キレイ……」

「渚に見せたかったんだよ。中学の卒業式の時みたいだな……」

「うん、そうだね。」

中学の卒業式の日も、兵庫の桜が満開だった。

仲間と別れるのはとても悲しかった。

中学のときの仲間たちは本当に最高だった。

皆、高校はばらばらになるといつても、地元は変わらないから会おうと思えば会える距離だ。

だが、俺と渚のように引越してしまつと、もうしばらくは会えない。

だから本当にさびしかった。

卒業式の後、特に仲の良かったグループで集まって、俺と渚を送り出す会つてのをやつてくれた。

みんなと別れるのは寂しくてしようがなかった。

別れは悲しい。

俺は、その時に会いは大切なんだと思った。

別れの瞬間は覚えている。

きつと、これからも中学の卒業式のこととは覚えていられると思う。

だけど、その仲間たちと最初に出会つたときのことは正直覚えていなかった。

その中で一番の親友だつたやつとは、幼稚園からの付き合いで、最初に交わした言葉や、最初に出会つたときのことなど覚えているわけもなかった。

小学校からの付き合いのやつとの出会いも、中学からの付き合いのやつとの出会いも、思ひだせなかった。

なんとなく知り合つて、なんとなく一緒に過ごして。

きつと、出会いなんてちつぽけでなんでもないことだつたんだろうと思う。

でも、そこから全てが始まつたんだ。

あのなんとなくで生きた、最高の日々が……。

中学のときのことを思い出すと、なんだか泣けそうになった。

あの頃に戻れたらいいのに……なんて考えてしまう。

まだまだガキなのだろうか。

それが、もつと大人になつたら、もつと戻りたいと、そう願ひながら俺は生きていくのだろうか。

人との出会いって、ちつぽけなわりにかなり重要なんだよな。きつ

と。

これから先の出会いは大切にしたいと思った。
引越してきて、環境も変わって、これからは新しい出会いばかり
の毎日だ。

そのうち、こんなこと考えもしなくなるんだろうけど。

今はただ、この思いを忘れたくないと思った。

大人になりたくない・・・なんて思ってた。

今が幸せだから。

「なあ、渚。」

「うん」

「お前は・・・今、幸せか？」

「どうしたの急に？」

「いいから」

「うん・・・幸せ。とっても。」

「そっかあ・・・良かった」

「どうしたの？」

「いや、何でもないけど」

「なんか雄輔が変！」

「そう？」

「うん！！」

「はいはい。」

「も〜！！」

桜の花びらが渚の頭のとっぺんに落ちた。

花びらをとってやろうとして、髪に触れた。

黒くてツヤがある、さらさらのショートヘア。

指をおくと、するりと通りぬける。

しばらく無意識に渚の頭をなでていた。

「雄輔？」

名前を呼ばれて我に返り、渚の頭から手をどけた。

「あ、ごめん！」

「ううん、いいよ」

俺は、もう一度渚の頭をなでた。

「俺もさ、幸せだよ。お前がいてくれて。」

渚と桜を見ながら、俺は、大人になったときのことを考えていた。まだちゃんとした大人になれるかどうかもわからない。

だけど、俺には夢がある。

渚と結婚して、幸せにしてやること。

渚の幸せが俺の幸せ。

そのときの俺は明るい未来に胸躍らさせていた。幸せしか感じていなかった。

高校生活の始まりに、ただ充実感をいただいていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1489h/>

Love of prototype

2010年12月25日17時56分発行